八面大王論

― 古田武彦氏の「八面大王論」を補強する ―

藤沢市　　久保玲子

このタイトルは、私の論考によってではなく、その地に存在する遺跡や神社、地名などを、別の伝承や説話に置き換えて、その真実を隠しながら、1,300 余年にわたって、九州王朝最後の歴史を伝え護ってきた人々の存在が、調査により明らかになって来たことを紹介して、古田先生の「八面大王論」の補強とするものです。

１ 古田武彦氏の「八面大王論」（骨子）※

① （日本書紀天武紀の信濃遷都）天武 13 年 2 月「三野王、小錦下采女臣筑羅等を信濃に遣わして、地形を看さしむ。是の地に都つくらむとするか」、同年閏 4 月「三野王等、信濃の国の図を進れり」。14 年 10 月「軽部朝臣足瀬らを信濃に遣わして行宮を造らしむ」。（古）この信濃遷都の記事は、白村江の戦い以前の九州王朝の記事である。

② （信府統記−松本藩地域伝承資料）昔中房山の山中に「魏石鬼」、「八面大王」とも称した者がいて人々を苦しめた。それを坂上田村麻呂が退治した。
（古）坂上田村麻呂時代が違うので、田村利仁将軍のことであろう。

③ （古）「八面大王」は、九州王朝の天子（後、皇太子か摂政と訂正）サチヤマである。

④ 安曇野、松本や善光寺平、佐久方面に集中する「高良社」。（古）筑紫の痕跡である。

⑤ （続日本紀の山沢亡命記事）慶雲 4 年「武器を挟蔵して」、和銅元年「山沢に亡命し、禁書を挟蔵して」、養老元年「山沢に亡命し兵器を挟蔵して百日まで首せずんば」の出頭命令。（古）「倭国」勢力の残存軍に対する対応である。

※（資料出所）東京古田会ニュース No.102 号～109 号掲載の「「八面大王論」。

２ 鬼無里に残る「遷都」の痕跡

古田先生の「八面大王論」を知って、思い当たることがありました。一つは、鬼無里の存在です。安曇野の西側山中にあたる「鬼無里」には、従来から「鬼女伝説」があります。

「千年ほど前、源経基の側室が鬼無里に幽閉され、『われは都のものぞ』といったため、村人は内裏屋敷を建てて住まわせ、西京、東京や二条、三条などの条里を敷いて暮らしたが、のち、都に登ろうとして露見し、平維茂に退治された」というものです。

この内裏屋敷跡や西京、東京、二条、三条などの条里地名は、現在も存在していますが、内裏や条里の存在は、鬼女の身分や時代も違い、信憑性に欠けるものです。

鬼無里の調査を始めてみると、現在では、古田先生が指摘されたと同様の、天武紀の信濃遷都探査の場所を鬼無里としています。そして、「鬼無里に赴いた一行は、裾花川畔の高丘に使者館を設けて東京と定め、加茂神社を勧請し、対岸を西京と定め、春日神社を祀り」「鬼門の守護神として、白髭神社を祀った」との、新しい情報が観光パンフ載せられてい

ます。この裾花川対岸に、鬼女伝説の「内裏屋敷」があり、その周辺には、「館武士」（やかぶし）という武士の駐屯地や「鍛冶屋敷」という鉄工所があったと記されています。

これらの点を合わせて考えると、この場所は、最後の九州王朝が実際に「遷都」した地であったと思われます。このような伝承は、近年、さらに具体的になり、内裏周辺の施設などが、観光パンフにもイラストで具体的に載せられています。真実の歴史を知らなければ描けない、具体的な情景ではないかと思われます。そうなると、遷都の時期も、白村江の戦い以前ではなく、以後ではないかと思われます。

また、その調査のため、土地の古い歴史に詳しいという松厳寺の住職を訪ねた時、その寺の本堂の屋根に、宮地嶽神社とそっくりの３個の三階松の紋があるのを見つけました。

住職の話によると、「寺の創建に協力してくれた３人の松本さんたちの紋を付けた」とのこと。その松本姓は、現在もこの地に４０軒ぐらいあるとのことでした。

この話で、思い当たるのは、博多の旧千代地区にある「翁別神社」の神紋が三階松であること、その神社を祀って来たのが、松本氏であることでした。

鬼無里は降雪地帯の山間地で、現在でも米の耕作地に乏しく、遷都時の食糧確保は困難なため、松本盆地や安曇野に降り、耕作地を確保しなければならなかったと思います。

しかし、鬼無里にもう一つ疑問がありました。「月夜の陵」の存在です。内裏屋敷の上に「月夜の陵」という名の古墳があり、「白鳳時代に、天武天皇が信濃の遷都地の探査ため遣わした皇族某が、この地で客死した古墳」と説明されています。

この「月夜の陵」は、この地に遷都し、逝去した九州王朝の大王の墓ではないか。安曇野の八面大王は、その子供など、次世代の大王ではないか。安曇野における八面大王の殲滅戦が、700 年前後とすると、その時点での、鬼無里に遷都した大王の年齢は、すでに高齢ではなかったかと思えます。また、鬼無里に残る内裏や条里地名などの遺構は、相応の年月、遷都として実際に存在し、定着していなければ現在まで残らないのではないかとも思えます。

３ 戸隠神社の謎

これに関連して、さらに疑問がありました。それは、鬼無里の隣接地、戸隠の存在です。

この地に、天の岩戸が飛んできて戸隠山になったという伝承です。その地に何で天の岩戸が飛んできたのか。その奥宮に天手力雄命だけでなく、里宮（中社）に天八意思兼命、宝光社に天表春命、火之御子社には天鈿女命まで、点在して祀られています。しかしそこに天照大神はいません。

当初その戸隠神社（中社、奥社）の創建年代は、不詳とか諸説出されていたのが、近年の資料には、「天武期に、遷都地に宮を造らせた三野王が祀った」と由緒に書かれています。

この戸隠神社の存在は、「月夜の陵」の主を祀った神社ではないか。岩戸が開けられたのに天照がいないということは、天照が岩戸に隠れたという意味の「戸隠」ではないのかとも考えられます。このことから考えると、戸隠神社は、鬼無里の内裏で隠れた（逝去した）

大王を祀り、その真実を隠すために、岩戸神話を借用したのではないかと思われます。

４ 小川村に残る地名と神楽

鬼無里の東に隣接する小川村には、「日本記」という地名があります。小川村の役場や資料館で調べた「日本記」の地名由来は、いずれも、昔その地に「二本の松の木があった」から、との説明や記述でした。しかし、古いことに詳しいという「高山寺」の住職は、二本の木の代わりに「日本と記（しる）した」との説明でした。この「しるした」とは、日本国の記録のこととも、また、「日本」という地名のこととも解釈できます。白村江の戦いで中国の捕虜になった百済の将軍、「祢軍」の墓誌には、白村江の戦いでの倭国名を「日本」と記しており、これらから推測すると、この鬼無里の地でも、九州王朝の国名を「日本」と名乗り、この地を「日本」国の首都と宣言したのかもしれません。いずれにしても、「二本の木」を「日本記」としたなど信じられない話です。その他にも、鬼無里に「府内」、小川村には「高府」、「宮」、「釜蓋」などの地名が点在していますが、そのうち「釜蓋」という地名は、特に対馬や北九州に多い地名であることが、九州地名研究会の古川氏の記述からも解りました。

さらに、小川村高府にある「武部八幡神社（主神はヤマトタケル、天照大神、武御雷命、姫大神など天系の神）の石柱群には、松本姓の名前が多数あって、その横に鬼無里の地名が書かれたものが多く、また、資料館には、小型ながら周囲に龍の彫刻が一面に施された、立派な三体の神楽が展示されていて、その扉の留め金は、すべて三階松でした。これらの痕跡から、小川村も、鬼無里・戸隠と一体の地であったことが見て取れます。

５ 安曇野、松本に残る神社や地名

安曇野の八面大王の窟屋とされる場所の地名は、宮城（みやしろ）で、対馬の有明山の名を模したと思われる有明山の山裾にあります。その窟屋の入口には、龍紋の素晴しい彫刻の隋神門を持つ「有明山神社」があり、その祭神は、天手力雄命、天八意思兼命、天鈿女命など、戸隠の地に点在していた神々が一同に祀られおり、ここには、戸隠神社でいなかった天照大神が、有明山山頂の奥社に祀られています。このことから、ここには、天照大神に模した大王が「八面大王」と呼ばれ、生存していたと考えられます。

また、松本市一帯は、古くは「束間」（評）と呼ばれていましたが、その松本は、古田先生が指摘されたように、書紀天武紀にある「束間温湯」の行こうとしたのかという記述や、「曲水の宴」があったという先生の指摘に加え、「倭」と書いて「やまと」と読む地名も現存していることから、九州王朝が稲作の生産拠点とした「松本」地名ではないかと思われます。この地の「筑摩神社」には、八面大王の首が埋められたと伝わる「首塚」がありますが、この神社には宗像三女神が祀られています。

６ 鬼無里・戸隠を囲む謎の仏像

戸隠・鬼無里を拠点として、最後の九州王朝が遷都したとすると、その地を囲むような場所に謎の仏像３体が出土しています。その一つは、戸隠から下った、信州と境を接する妙高市の関山地区に、百済仏と思われる小さな仏像（銅造菩薩立像）が出土しています。誰が、何時持ち込んだか不明で、その後、７０８年に創建された関山神社に、秘仏として祀られており、また、安曇野の八面大王の拠点である松川町の観松院にも、長らく個人宅に置かれていたという百済仏（弥勒菩薩半跏思惟像）があり、加えてその中間に位置する善光寺の仏像（一光三尊阿弥陀如来像）も、信濃の善光が難波の入江を通ったとき、「汝が故郷信濃の国は我が有縁の地なれば背おいて帰るべし」といって善光の背中にとび乗り、善光の自宅に置かれた後、現在の地に遷座したとされ、その後善光寺は建てられたと縁起にあります。それらの三体は、地理的に、戸隠と鬼無里を囲む場所に位置し、いずれも「先に仏像ありき」の正体不明の仏像です。この中で、善光寺仏は、善光寺の立地場所や九州年号の存在、法隆寺との関わりの伝承などを総合すると、九州王朝との関連を隠すための善光説話と思われ、いずれも、遷都時に九州王朝が持ち込んだ仏像とも考えられます。

また、善光寺を含め、鬼無里や善光寺平の地には、金光、白雉、白鳳などの九州年号が残されています。さらに、安曇野や善光寺平から佐久にかけての一体には、「高良玉垂命」を祀る神社や石碑が点在していますが、それらは、八幡系や宗像系の神社とともに見つかる例が多いことから、信濃に遷都した最後の九州王朝の人達が、祖霊神として祀ったか、遷都した大王も、神官名などとして「高良玉垂命」名を継承していたのではないかともと考えられます。

７　「雨宮神社の奇祭」の意味するもの

善光寺平にある「屋代」の地名は、古事記に、「社を屋代と改む」とあるのと同じ「社」であったと思われ、その地にある雨宮神社の「雨」は、「天」であると報告書にあります。

この雨宮神社には、白鳳１３年の年号と「雨宮神社の神事」という奇祭があります。

朝から行われる祭りは、雨宮神社を挟んで、お旅所から「御歌」といわれ、江の島、遠江、津島、そして丹後、但馬、阿波の地名の入った古風な節回しの歌と笛太鼓に合わせて、千枚の紙で作った髪の毛の獅子頭をかぶった三人を中心に練り歩き、夕方、雨宮神社前に来ると、「化粧落とし」といって見物人に獅子頭の髪の毛を全部毟らせ、さらに夕闇が迫ると、神社先の「生仁川」の「斎場橋」から、獅子頭をかぶった三人が水中に逆さに吊るされ水責めにされる「橋がかり」という行事です。「化粧落とし」や「橋がかり」とも明らかに拷問場面としかいえない不気味な祭りです。その後は、「斎場橋」を渡った「唐崎社」で、左に三回るという「葬式」行事をやり、祭りは終ります。祭りを仕切った人々は、その後、地域内にある天系の神社に参拝するとのことです。その最初に回ってきたという「大宮神社」に、松本の倭地区から嫁いだ友人（古田会会員）のお舅さんは、「わが家の祖先は九州から来た」とか「信濃」地名が「科野」に替えられたのは、この地に船で罪人が送られてきたから、と話していたそうです。多元の会の赤尾恭司氏は、「万葉集信濃の歌」の四首は

連歌で、千曲川の地に捉えられてきた人が、殺されたか、死体となって船で連行されるかする情景を歌ったもの、と解説してくださったことがありましたが、この信濃の歌は、「雨宮神社の奇祭」の情景と重なるものがあります。この奇祭の異常な情景は、それが「禁書」を入手するためか、取り逃がした八面大王一族の行方を得るためかは不明ですが、大和側の知りたい重要な情報を得るための、拷問虐殺行為であったと思われます。この善光寺平の地で、１、３００年以上前の惨事を、歴史の証言記録として暗闇の中で再現し、神事として護って来たのが天族の後裔たちです。

８ 九州王朝の遷都を準備し支えた勢力

以上の痕跡からは、九州王朝の科野遷都は、なぜ可能であったかという疑問が生じます。

弥生中期、越後糸魚川の勾玉や信濃の和田峠一帯の黒曜石を支配していた出雲族の地に、壱岐・対馬系の勢力が侵入し、戦闘によってその地を奪い、支配していったことが解ってきました。善光寺上の「箱清水」という地域から、弥生中期と位置づけられた、北九州産といわれるベンガラ塗りの土器が大量に出土し、そこから、特に佐久地方を中心にその土器が多く出土していることから、長野教育委員会は「赤い土器の国」と称しています。この土器が、上越の大和地区の「吹上遺跡」と呼ばれる大規模な勾玉工房跡から出土し、紀元前２００年当初は、島根を含む北陸系が７割、信州系が３割だった出土物が、やがて逆転していると、上越埋蔵文化センター元所長の小島幸雄氏は記しています。それに隣接する妙高市からも、高地性環濠集落やその両側に朱塊が出土した古墳群が科野方面に続き、現在小島氏が発掘中の、上越大和地区の環濠集落「釜蓋遺跡」からも、信州系のベンガラ土器や製作途中の「勾玉」が出土しており、この勢力が、勾玉や黒曜石の製品を、船による交易や関東方面に送り出していたとして、小島氏は、科野に「とてつもなく大きな勢力、『王権があった』」と分析しています。

この王権の中心地であったと思われる善光寺平の地は、４世紀後半から「森将軍塚古墳」「有明山将軍塚古墳」など、ベンガラ刷りの墓室や埴輪を持った多くの前方後円墳などが点在し、この地の田圃からは、「信濃団」という軍隊と軍人名を示す木簡が出土していますが、科野一帯を調査してみると、天竜川地帯を含め、赤い土器や多数の勾玉をはじめ、鉄、銅製品など、渡来系を含む豪華な出土物があり、かつそれらの地に、ベンガラ塗を含む多数の前方後円墳や八幡系・宗像系の神社が多数存在していることから、古代から壱岐・対馬系の天族が信濃全帯を支配していた形跡が見て取れます。

このような地に最後の九州王朝の数百、数千人かが、武器・財宝、禁書などを持って移動し、「遷都」出来たのも、あらかじめ、この地を支配する天族の先人たちが、その遷都地を選定し、準備して、定着後も支えてきた勢力であったからこそ、可能であったと思われます。大和勢が、安曇野で捉えられたと思われる八面大王一族を、わざわざ善光寺平の地に連行して虐殺行為を行ったのも、この地が、天族の強力な先人勢力の拠点であったこと

からこそ、ではなかったかと思われます。

９ その後の九州王朝人の痕跡

紀元前２００年に、上越から科野の地に入って来た壱岐・対馬系の天族は、弥生中期後半から古墳時代を通じて、関東甲信越から東海にかけて広がっていった痕跡が、調査により解ってきています。それら先人たちの支配先を頼って、安曇野などから逃げのびた九州王朝人たちは定着し、それらの地にも三階松紋や松本姓を残しています。

（完）